〈研究ノート〉

首里城跡出土のサル骨考

盛　本　　勲

１．はじめに

グスク時代の遺跡からは、稀に琉球列島においては棲息していない動物骨が出土する。

例えば、今帰仁城跡一ノ郭出土のトラの骨（ネコ科）（金子1991）や勝連城跡三の郭北側城壁出土のオウム科の骨（金子1990）等がある。

沖縄県教育委員会は、1997（平成９）年度に国営沖縄記念公園事務所より委託を受け、首里城跡管理用道路地区の発掘調査を実施した。翌1998（平成10）～1999（平成11）年度に、発掘調査報告書刊行に向けた出土品の整理、分析、研究を進める過程で、渡辺誠名古屋大学の指導により、出土獣骨中にサル骨の可能性を有する資料が２個体分含まれていることが指摘された。当該件の当否を確認する必要性から、渡辺を介して京都大学霊長類研究所の毛利俊雄に分析、研究を依頼した結果、サル骨と同定された。さらに、毛利が高知医科大学の吾妻健らとの共同研究によるミトコンドリアＤＮＡ分析研究の結果、ヤクシマザル[註1]とのことが判明した（吾妻ほか2001、庄武・川本2001）。

遺跡出土のニホンザルの骨は、縄文時代から中世遺跡での出土が知られ、出土例や１遺跡出土数では縄文時代の事例が最も多いことが明らかとなっている（長谷部1924、直良1947、酒詰1961、本郷ほか2002[註2]）。周知のように、自然分布の南限である屋久島以南の奄美・沖縄諸島の島々には先史時代以降、ヒト以外の霊長類の生息は皆無である。

本稿は、自然分布外である首里城跡出土のサル骨の出土意義等について、検討を行うものである。

２．出土遺跡および出土地点の概要

出土遺跡および地点は、約450年間にわたり琉球王国の王宮として、栄華を誇った首里城の中心的建物であった正殿の南方約100ｍの地点である。絵図等によれば、調査地点は城内に在していた３ヶ所の調理場のうちの一つである大台所（うふでーじゅ）の南側城郭石積みの外側部分である（図１）。

調査地点は40～60度の傾斜地形をなすとともに、琉球石灰岩が基盤をなした凹凸の著しい地形であった。このため、凸部に被覆土は殆どなく、遺物包含層は主として凹部に堆積している状態であった。この堆積状態はプライマリーではなく、おそらく北方の内郭地区からの投棄等によるものであろうと判断された。出土遺物のほとんどがⅠ層若しくは表面採集扱いとなっているのもこのためである。

一方、傾斜部の裾部からはほぼ平坦地形をなし、民家の拡がる南側部分に延びていくが、その平坦面の一部で遺構が検出された。検出面は、北側の傾斜部と南側の民家の間の限定

された範囲であった。

当該地点は、旧琉球大学のサークル棟などが所在していた場所であったこともあり、建物の地中梁やゴミ捨て穴等が掘り込まれていたことから、検出遺構の全貌については判然としなかった。

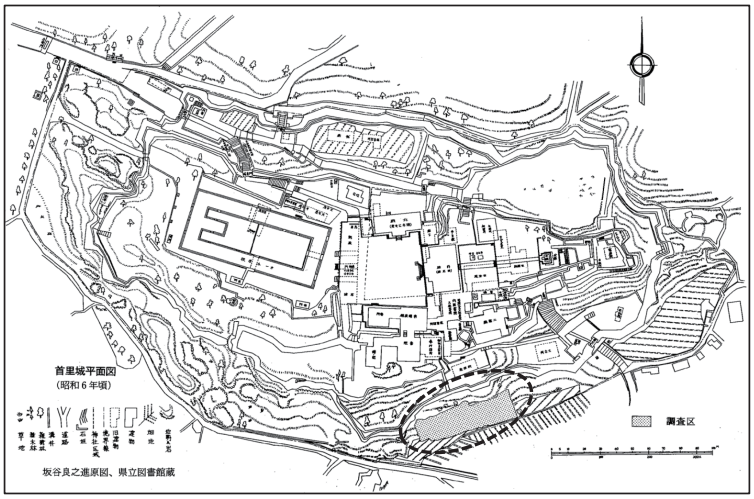

図１　旧首里城図（昭和６年作成）調査地点位置図(朱線で囲った東南から南西部に延びた横長の方形状の網点(〇)部分)

しかし、遺構内には拳大程の石灰岩礫を充填して敷き均していることや遺構内から柱穴等のピットなども検出されていない状況等から、明治初期に作成された「首里舊城圖」に描かれた宿道（古道）であったものと推された。

傾斜地点等からは中国産をはじめ、タイ、ベトナム、本土、沖縄産の陶磁器類や瓦、塼、古銭、鉄・銅製品、玉、簪、土錘、煙管、石・骨製品、貝類・脊椎動物遺存体等が出土している。

出土品中、特筆すべき遺物としてサル骨や九州佐賀（鍋島藩）直営窯産の初期鍋島焼等がある。中国産や本土産等の陶磁器から一部に14世紀後半～ 15世紀代に位置付づられるものも含まれるが（比嘉2001)、概ね16 ～ 17世紀代のものが主体をなしている（城間2001)。

このことから、遺跡の形成年代は、概ね16 ～ 17世紀と捉えて良いものと考えている。

３．出土サル骨の動物学およびミトコンドリアＤＮＡの分析研究成果

同定されたヤクシマザル（ヤクザル）*Macaca fuscata yakui*は、霊長目オナガザル科に属し、屋久島の低地から永田岳山頂付近だけに棲息するニホンザルの分布の南限の固有亜種である[註3]。当該種は、屋久島が九州島と陸続きだった数万年前の氷河期に屋久島へ渡って来て、雨の多い屋久島の環境に合った姿になったと考えられている。本州島等のニホンザルに比べ、若干小型で体毛は密度が低く太くて長い。また、オスの成体は、髪が真中から左右に分れ、桃割と呼ばれる頬袋があり、顔と尻だこが赤く、尾が短い特徴は本土のニホンザルと同様である。山林に20～50頭ほどの群をなして住み、食物を求めて移動する。

植物を中心とした雑食性で、果実、種子、葉、芽、花、樹皮、キノコ、トカゲ、カエル、クモ等を食べる。

出土骨は、ほとんどがクリーム色を呈し、焼かれた形跡や顕著なカットマーク、切削痕などは観察されていない。

写真１　ヤクシマザル（ヤクザル）出土骨（沖縄県立埋蔵文化財センター蔵）（毛利2001：付編　図版84　獣類遺存体（ヤクシマザルより））
１．上顎骨(右)♀　２．下顎骨♀　３．胸椎　４．腰椎　５．仙骨♀　６．肋骨　７．肋骨　８．上腕骨♀　９．上腕骨♀　10．橈骨♀　11．橈骨♀　12．尺骨　13．尺骨♀　14．尺骨：近位部♂　15．大腿骨♀　16大腿骨　17．脛骨♀　18．脛骨♀　19．腓骨♀

残存骨はしっかりとしているが、いずれも破片か、または欠けたところがあり、完全な骨は含まれない。数量的は２個体分で、メスに属するものが33片（表１）、オスが２点（表２）の総計35片である（毛利2001）。

これらの骨について、毛利俊雄の研究結果から詳細を記すと（毛利2001）、２個体分の骨は、10歳前後の成体のメス１個体（個体Ａ）と5～6歳のオス１個体（個体Ｂ）である。

個体Ａに屬するとみられる骨は胸椎４片、腰椎２片、仙椎（第１仙椎の頭側半）、肋骨14片（いずれも長さ３cm未満の破片）、右上顎骨、下顎骨、（以下、左右揃った）上腕骨、尺骨、橈骨、大腿骨、脛骨、腓骨が各１点ずつの計33片となる（写真１・表１）。

歯は、右上顎骨の破片に直立する犬歯から第２大臼歯までの５本、下顎に直立する左側大臼歯３本と右側第４小臼歯・第１大臼歯の上下顎骨計10本、さらに下顎右第２大臼歯の

部位＼出土地		B･15　表採		
		右	左	不明
脊椎骨	胸椎			4
	腰椎			2
	仙骨・第１仙椎			1
肋　骨	破　片			14
上腕骨	近位部～骨体	1		
	近位部～遠位端		1	
橈　骨	近位部～遠位部		1	
	近位部～遠位部	1		
尺　骨	近位端～遠位部	1	1	
大腿骨	完　存	1	1	
脛　骨	遠位端～遠位部		1	
腓　骨	近位部～遠位端	1		
	近位部～遠位部	1	1	
合　　計		6	6	21

表１　メス骨出土一覧表（毛利2001より）

部位＼出土地		C･19　Ⅰ層	
		右	左
尺骨	近位部	1	1

表２　オス骨出土一覧表（毛利2001より）

遠心歯根が残存している（表３）。

これらの歯の萌出時期と咬耗度の関係をみた場合、野生ザルより飼育ザルに類似することから、年齢推定は飼育ザルの歯の咬耗との比較によって行ったようである。

一方、個体Ｂに由来する骨には左右１点の尺骨があり（写真１・表２）、左右とも近位端を含む長さ５㎝程の破片である。いずれもの肘頭の骨端が癒合であることから、未成熟個体に由来すると思われるものであるが、個体Ａの尺骨に比べると、やや大きいとのことである。

このような骨学的特徴として、個体Ａの残存部位は全身にわたっていることから、埋葬後撹乱を受けたと解釈することも可能であるが、かなりの細かな肋骨片が出土している割には、手や足、尻尾骨が皆無であることは多少不自然な印象を受けるとのことである。また、個体Ｂはフック状の特異な形態を示す尺骨の近位部が左右揃い、ほぼ同じ大きさの破片として、他部位を全く伴わず残存していることに対しては、強い選択性、意図を感じさせられるとのことである。反面、割れ目は左右とも白骨化の後に折れた状態で、特に人為を示唆している訳ではないようである。

出土地＼部位	右上顎骨					右下顎骨		左下顎骨		
	C	P 2	P 3	P 4	M 1	P 4	M 1	M 1	M 2	M 3
B･15　表面採集	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

表３　歯牙出土一覧表（毛利2001より）

４．出土骨の形態学的特徴と出土に関する先行見解

何故、過去から現在において自然分布での棲息が見られない沖縄で、サル（骨）がしかも王府の居城であった首里城跡から出土したのであろうか。はっきりしていることは、これらは県外からの持ち込みであることに疑義はない。

では、何の目的で持ち込まれたのか。このことを考えるうえでの基礎となる骨の形態学的特徴と、これまでに提示されている当該骨の搬入目的に関する先行見解を確認しておきたい。

はじめに、骨の形態学的研究から（毛利2001）、その特徴を整理しておく。

1．骨には焼かれた形跡や顕著なカットマーク、切削痕などは観察されない。
2．いずれも破片かまたは欠けており、完全な骨は含まれない。
3．個体は２個体である（仮称；個体Ａ・Ｂ）。
　個体Ａ＝10歳前後のメス　　個体Ｂ＝５～６歳のオス
4．個体Ａ：歯の萌出時期と咬耗度の関係から、野生ザルより飼育ザルに類似
5．個体Ａ：かなりの細かな肋骨片が出土している割には、四肢骨や尾骨が皆無
6．個体Ｂ：肘頭の骨端が未癒合であることから未成熟個体
7．表１～３からも明らかなように、個体Ｂは左右の尺骨が１点ずつの２点のみであるのに対し、個体Ａの残存部位はほぼ全身骨に及ぶ。

このような出土骨の形態学的特徴を踏まえてか否かは判然としないが、自然分布域外よりの出土という当該サル骨に対して、その搬入目的に関し、２～３の先行見解が示されている。

以下にそれらを紹介し、私見を述べる。渡辺誠は発掘調査報告書刊行直後の沖縄タイムスへの談話取材に対し「漢方薬かペットが考えられるが、薬だったらもっとありそうなものだが・・・」との談話を寄せている（沖縄タイムス2002）。また、琉球史家の上里隆史は出土骨が雌雄であることから「このサルはおそらくツガイで持ち込まれ首里城内でペットとして飼育されていたのでしょう」と、ペット（愛玩動物）説を唱える（上里2007）。宮城弘樹も絵図や記録類から琉球王国時代の愛玩動物の一つと捉える[註4]（宮城2019）。このように、搬入目的には漢方薬とペット（愛玩動物）の２点が提示され、上里隆史はペット（愛玩動物）説さらに深化させ、２体のサルはツガイであったとまで推測している。これらの見解を、骨の形態学的特徴から検証してみよう。

まず、渡辺の漢方薬説であるが、氏も述べているように、漢方薬であれば僅か２個体という出土量は少なすぎるうえ、個体Ａは野生ザルより飼育ザルに類似している骨学的所見から、飼育ザルの可能性が大であるサルを漢方薬目的で潰すということは可能性として高くないと考える。また、上里の個体Ａ・Ｂはツガイとの考え方は、動物学的にツガイの証明が明らかでない現今ではその当否に関する結論は避けるべきであろう。

５．沖縄におけるサルに関する史資料および絵図等

自然分布では棲息していないサルに関する記録が、沖縄関係の文献史料や地誌類等にもさまざまなかたちで散見される。これらは、その背景を考えるうえで重要な示唆を含んでいるものと考える。本節ではそれらを渉猟し、導入目的を考える検討資料とする。

ａ．「鳥獣門」に登場するサル

はじめに、文献史料をみてみると、陳侃著の『使琉球録』に「鳥獣門」として、獣には牛や馬、羊、豕（ぶた）、猫、山猪（やましし）等の一般的な動物の他に鹿、猿（さる）の記載がみられる（原田訳注1995）。

これらの中で、琉球列島には棲息していない鹿、猿についてみると、鹿は後期更新世段階に棲息していたリュウキュウジカやリュウキュウムカシキョン等の古型のシカは、約２万年前には絶滅したとのことから（長谷川1980）、現存するシカはケラマジカ*C. n. keramae*を指すとのことである（城間1999、2002）。城間によれば、当該シカは中国からの使節である冊封使の供応料理「御冠船料理」に資する目的で薩摩から移入され、繁殖を重ねた結果、小型の亜種としての特徴を備えたとのことである（城間1999、2002）。

一方、猿は原田禹雄の訳注によれば、サルは猿（さる）＜撒禄sā-lù＞と記載され、民俗語彙では「サール」と呼ばれていたことが判る（原田1995）。

ｂ．厩猿（うまやざる）信仰[註5]

徐葆光著の『中山傳信録　新訳注版』にも「鳥獣」として、猴＜煞陸サル＞の記載がみられる（原田訳注1999）。

原田禹雄に首里城とサルの関係について伺ったところ、首里城内においても厩が所在し、城内で馬が飼われ「馬の守護者として厩に猿が飼われていたことと関係がある、と私は考えております」との教示をいただいた[註6・7]。琉球国内で猿が飼われたということに関しては、『大島筆記』[註8]の「一　熊猿」の項に「居らず、猿は薩摩より取寄たるがたまゝ居る也。畢竟深山幽谷なき國ゆえなるべし。」との記録からすると、薩摩から取り寄せて飼育していたことが伺え、原田の教示には傾聴すべきと考える。しかし、残念ながら、守護動物に関する傍証の史資料は教示いただけなかった。

サルと馬の関係については、設楽博己も指摘している。設楽によれば「柳田國男は平安末の12世紀に編まれた『梁塵秘抄（りょうじんひしょう）』に、サルを厩につないで遊ばせたことが記されていることを指摘し、サルは早くから神馬を含む馬の病気平癒、守り神であり、馬医を兼ねた猿曳はもともと厩払いを行ったものであったとした」と記する。さらに、鎌倉時代末の『石山寺縁起絵巻』に厩舎につながれたサルの絵が知られていたが、近年岡山市所在の岡山大学構内の鹿田（しか）遺跡内の８世紀後半の井戸内から馬の手綱を握りしめたサルが描かれた絵馬が出土していることから、猿駒曳の歴史が８世紀に遡ることが明らかになったとする（設楽2015）。

首里城内の厩については、朝鮮王国の正史『李朝実録』世祖８年（1462）２月の項【125】に、韓国・済州島の梁成らの乗った船が暴風に遭って南方に流され、久米島に漂着し、１ヶ月程滞在した後、王府の貢納船で那覇に送られ、そこで約４年の歳月を過ごすが、その間に首里城へも出向き、尚真王時代の首里城の状況についても記している。それによると「王城は凡そ三重にして、外城に倉庫及び厩有り。中城は待衛の軍二百余、之に居る。内城に二三層の閣有り。大概、勤政殿の如し。」と記されるとともに、同項に「一、外城の内に

倉庫及び内厩有り。常に大馬六匹を養う。」と記されている（高良1996、真栄平2010）。このことから、15世紀中葉頃の首里城には、後世には存在しない[註9]厩があり、大馬を６頭飼育していたことが伺える。城内で役畜等として、馬を使う必要はないことから、これらの馬は出撃時の騎兵用の馬と考えるのが妥当であろう。

ｃ．猿曳（猴回し）

次に、猿曳（猴回し）について触れる。19世紀初頭（1808）の髙宮城親雲上の作とされる歌舞劇･組踊の世話物「花売りの縁（ハナウイヌイン）」:「森川の子」に、猿曳（猿回し）の場面が登場する（大城2013）。

首里の下級武士である森川の子（シーニ士族の位階）は、不幸続きで生計が成り立たなくなったので、妻の乙樽（うとぅだる）と幼い息子・鶴松を残し、遠く離れた山原の大宜味へ出稼ぎに出た。一方、妻の乙樽は首里の良家に乳母として奉公し、何事もなく平穏に暮らすが、森川の子とは音信普通となる。12年もの歳月を経、森川の子が大宜味の津覇村に居ると伝え聞いた乙樽は、成長した息子の鶴松を引き連れ、森川の子を探す旅に出た。

親子は道中出会った猿曳（猴回し）に消息を尋ねるが、猿曳は他村出身のものであったこともあり、手がかりは得られない。猿に興味を寄せた鶴松の望みで猿の芸（写真２）を見て、旅の疲れを癒やした。その後、通りがかった薪木取り老人に出会い、森川の子の消息を尋ねるが、森川の子は２～３年前までは津波村の兼久に住んでいたが、何をやってもうまくいかない様子だった。薪木取り老人は途方に暮れる親子に、人の往来の激しい塩屋田港村ならば何か手掛かりが得られるかも知れないと助言した。乙樽と鶴松は一縷（いちる）の望みを託し、田港村へ向かった。二人は田港村へたどり着き、そこに現れた花売りから梅の花を一枝買い求めようとしたところ、この花売りこそが探していた夫、森川の子であることに気付くとともに、森川の子も旅人が自分の妻と息子であることに気付き、落ちぶれた我が身を恥じ、身を隠そうとして小屋の中に逃げ込んで行ったが、乙樽の説得により夫婦・親子の再会を喜び、三人は連れ立って首里に帰り、暮らすことになったとのことである。

写真２　組踊「花売りの縁」の猿曳（猴回し）の光景（那覇市歴史博物館提供）

猿曳（猿回し）の件については、家譜資料でも確認され、『向姓家譜』一世尚周（義村王子）の乾隆58（1793）年の項に、義村王子が鹿児島へのぼった際、「十八日　大守公従内院賜掛物二幅（法眼洞春筆）菓子箪笥一机一猿一疋猫二疋」（（十二月）十八日に、大守公は内院から掛物二幅（法眼洞春筆）・菓子箪笥一机・一猿一疋・猫二疋を（私へ）下された）とある（那覇市史編集室編1982ａ）。さらに、『翁姓家譜』（伊舎堂家）の八世盛方の道光８年（1838）の項には「二十六日蒙三位公召令看御能越後獅子猿芝居御鷹狩」（十一

月）二十六日に、三位公の指示により、御能・越後獅子・猿芝居・御鷹狩などを拝見した）とあり、鹿児島で見物した事物の中に「猿芝居」があったことが記されている（那覇市史編集室編1982ｂ）。

ｄ．ペリーの事例－愛玩動物としてのサル

絵図でも確認できる。しかし、後述するように、これは琉球人の行っている行為ではなく、外来者の行っている情景であるが、参考として記しておきたい。

19世紀中葉（1853～54年）の黒船来航のペリーに随行した画家のヴィルヘルム・ハイネ（Peter Bernhard Wilhelm Heine）は、1893年５月26日に那覇に来航した際、多くの名所旧跡等を描写しているが、その中の一点に泊村の寺[註10]の庭？でのサルと人の情景が描かれた画がある（図２：中央左寄り）。情景が藝の調教中か、あるいはバナナ等を給仕中の光景かについては判然としないが、人とサルの微笑ましい情景である。しかし、残念ながら、当該情景は琉球の人とサルの所作ではなく、ペリー一行に随伴した水夫とサルの情景であることが『琉球王国文書』から判る。同文書には、天久聖現寺に投宿中のペリー一行がサルを引き連れて、しばしば崇元寺や安里矼、さらには泊村、久米村等まで散歩に出かけていたことが記されている（琉球王国評定所文書編1991）。

図２　「天久聖現寺」の庭での人とサルの光景（ペリーの日本遠征に同行した絵師ハイネの挿絵より）（那覇市歴史博物館提供）

琉球へのサルの移入については『大島筆記』中の「諸産物大様」に「一　熊猿　居らず、猿は薩摩より取寄たるがたまゝ居る也。畢竟深山幽谷なき國ゆえなるべし」と記されている（戸部1968）。記録から伺うと熊と猿は居ない。サルは薩摩より取り寄せたことから偶々いる。居ないのは奥深い静かな山や谷がない国であるからとのことである。

しかし、成宗10（1479）年４月癸卯日に琉球国から朝鮮国へサルを進献している（國原2001）。このことからすると、朝鮮国へ進献したサルは薩摩から取り寄せたものであったであろうか。なお、この進献サルに関し、理由は判然としないようであるが、朝鮮では一度断った後で、後に受け取っているとのことである（國原2001）。

６．まとめ

首里城跡出土のサル骨について、骨学的分析研究をもとに、同時代若しくは前後の史資料を渉猟し、検討を行ってきた。

結果、従来指摘された漢方薬やペット（愛玩動物）としてのみの搬入目的ではなく、首里城内での馬の飼育に伴う守護動物、さらには大道芸：猿曳（猿回し）等の目的をも検討すべきではと考えるに至った。

出土サル骨に関して、再整理をしてみると、文献記録としては冊封使の陳侃や徐葆光らが著した『使琉球録』や『中山傳信録』、さらには家譜等の史資料からして、18世紀以降には確実にサルが存在していたことは明白である。当然のことながら、これらのサルは自然分布がみられない沖縄には棲息していないことから、外部から人為的に持ち込まれたであろうことは疑う余地はない。

では、その外部の具体的な場所は何処か。

周知のように、現在沖縄周辺地域には日本列島にニホンザル、中国およびインドシナ半島にアカゲザル、台湾にタイワンザル、インドシナ半島、マレー半島、フィリピンインドネシア島嶼部にカニクイザルが分布している（毛利雄ほか2000）。出土骨がこれらの地域・種のいずれに属するかを判定するための遺伝子分析、ＤＮＡ分析の結果、屋久島に生息するヤクシマザル（ヤクザル）であることは既述した通りである。このことは、一世尚周（義村王子）の乾隆58（1793）年家譜資料や大島筆記等の記録からも明らかなように、薩摩から取り寄せたことが判る。また「たまゝ居る也」との記録から、過去に取り寄せたものが居るという点からすると、取り寄せて飼育（飼育期間については判然としない。一定期間か、終生か）していたことが伺えよう。

述べてきたように、わざわざ薩摩から取り寄せて飼育する意図は何であったか。すなわち、往事の首里城にサルを必要としていた目的は何であったか。

朝鮮人・梁成らが見た首里城の時代であれば、原田禹雄の教示のように、首里城内の厩で馬が飼われ、馬の守護者として飼育されていたと考えることも可能かと考えられよう。

城内の何処の地点に厩が所在し、何時から無くなったかは発掘調査によっても確認されていないことから判然としない。18世紀初頭の絵図等を基本コンセプトに復元整備された首里城に厩は存在しないことから、この段階には厩の守護動物としての捉え方は成り立たないものと考える。

一方で、推論の域を脱し得ないが組踊「花売りの縁」の猿曳（猿回し）の場面や八世盛方の道光８（1838）年の家譜資料の記事中の薩摩で見物した一つに猿芝居の報告があるように、猿曳（猿回し）用（筒井2013）のサルで、冊封使の歓待行事等に際し、猿曳（猿回し）が行われ、該目的のためのものではなかったかと考えるが、いかがであろうか。

導き出された推論については、今後さらに研究を深化させていかなければならないことは多言を要しないことは改めて記すまでもない。

ところで、当該サル骨の出土は1997（平成９）年であるから、本年からすると25年も経過したことになる。その間、記録保存や史跡整備等に伴い、同時代の発掘調査が多数行われ、少なくない量の動物骨の出土報告が知られるが、サル骨の報告は寡聞にして知らない。

このことは、該資料の出土前も同様で、県内で発掘調査による出土サル骨は該資料２個体分のみである。自然分布外の地域のゆえ、当然といえば当然であるが、首里城跡という国王等の執務所でかつ冊封使の歓待場所という点と何らかの意味を示唆しているように思えてならない。

謝　辞

本稿をまとめるにあたって、下記の諸氏および機関よりご教示、あるいは資料等の提供を受けた。銘記して謝意を申し上げるしだいである。

新垣力、沖縄県立埋蔵文化財センター・倉成多郎・武石和実・当山昌直・仲原穣・那覇市歴史博物館・新美倫子・原田禹雄・山田浩世（敬称略・五十音順）

とりわけ、文献史料情報、解読等に関しては、山田浩世の助言に負うところが大きい。

文献史料に明るくない筆者に、種々の教示をいただき、改めて深謝申し上げる。

註

1）沖縄県教育委員会発刊の『沖縄県史　各論編１　自然』（2017年刊）の第１章　総論の脚注42）（沖縄県教育委員会2017）にニホンザルとしての補足説明があるが、正確な記述としてはニホンザルの固有亜種であるヤクシマザル（ヤクザル）とすべきであろう。

2）当該論考は2002年時点での集成であり、その後の増加も十二分に予測されるが、爾後の集成資料を知り得ないため、ここでは当該論考に依拠する。

3）外見上はニホンザルとほとんど変わらないが、ニホンザルに比べてやや小柄で、毛も灰色っぽく長くて粗い感を受ける。若干気性が荒いところもあり、2019年６月27日「沖縄子供の国」（沖縄県沖縄市）から同種のサルが逃げ出し、周辺住民を騒がせたことは記憶に新しい。

4）琉球王国時代の愛玩動物として、宮城が報告した泊村の寺（天久聖現寺）でのサルの情景（宮城2019）は、『評定所文書』から明らかなように、琉球人が行っている所作ではない。すなわち、ペリー提督一行に随伴した水夫（外来者）が行っている所作である。このことから、厳密な意味での琉球王国時代の歴史・文化に関わるものではないことから、当該事案は琉球の歴史・文化の解明からは除外すべきであると考える。

5）厩猿信仰とは、牛・馬小屋に猿の頭蓋骨や手の骨を祀り、牛馬の安産や健康、厩の衛生等を祈願する信仰で、秋田県や岩手県が中心で（野本1989、広瀬1989、中村2004）、当該信仰のために、多くの猿が捕殺されたようである。この信仰には１．猿と厩猿の関係を陰陽道で説明した防火説、２：放牧牛馬の管理説、３．落人の願望説等の諸説があるが、現在のところいずれも定説化とはなってはいないようである。

6）2019年７月29日付、消印の私信による。「簡単に文献を列挙できるつもりで蔵書を少々しらべたが見出せません。＜中略＞厩に猿が飼われていたことはまちがいありませんので、 その点から文献に当たって下さい」との旨も記されていた。

7）國原によると、朝鮮で馬の飼育に欠かせなかった動物は、日本から輸出されたサルであったとのことである（國原2001）。サルの馬の飼育に係る効果として、石田英一郎が『河童駒引考』で、インド・中国等広範な地域において、サルを馬の守護動物とする観念を共有していた指摘にふれ、朝鮮もこの観念に倣い日本にサルを求めたことは

先行研究で明らかにされている、と述べる（國原2001）。

８）1762（宝暦12）年の尚穆王代（尚穆11年）に、沖縄から薩摩へ向かった楷船（かいせん）が、暴風雨に遭い土佐国の西南海湾入り口に位置する栢島（かしわじま）の沖より湾内の大島浦への漂着事件があった。船は栢島から宿毛（すくも）の大島に回航されたが、その際土佐藩の儒学者：戸部良熙（とべよしひろ）が琉球王府からの琉蔵役の潮平親雲上（しおひらぺーちん）に、沖縄の事物ついて、尋問した内容を記録した書で、上・中・下・付録の全３巻よりなる（池宮1983、谷川代表編1968、戸部1968、中山1969、比嘉・新里解題1968）。

９）梁成らの記録によると、15世紀中葉の首里城の城郭構造は三重石積みで囲われていたとのことであるが、この三重が同心円状であったのか、あるいは部分的であったかは判然としない。発掘調査の成果や17世紀後半代に描かれた絵図等からも当該状況を示す証左はない。ちなみに、首里城跡の石積みの基本は一重であるが、継世門の曲輪のみは二重となっている。二重にした理由は、第二尚氏・尚清代（1546年竣工）に、往事横行しつつあった倭寇への防備のため、防備の弱かった城の東南部に城壁を築いたことが門前に建つ石碑から伺える。なお、首里城跡の復元整備の方針は、18世紀初頭（1715年）に再建された建物等を基本コンセプトに据えて行われたものである。

10）『泊誌』によると、ペリー来航時の上陸の地で、大島や各離島からの貢ぎ物を納めた泊倉跡地に天久の寺（聖現寺）が建てられたとのことである（とまり会1974）。

引用文献

吾妻健ほか　2001　ミトコンドリアＤＮＡ変異を用いた種判別：沖縄県首里城出土マカク獣と現世種との比較 『首里城跡―管理用道路地区発掘調査報告書』 付編　pp3 ～ 9

池宮正治　1983　大島筆記 『沖縄大百科事典　上巻』 pp394 ～ 395

上里隆史　2007　琉球・沖縄史トリビアの瑞泉　沖縄にいた？　トラとサル『最新歴史コラム　目からウロコの琉球・沖縄史』 pp161 ～ 162

大城學　2013　組踊「花売りの縁」台本の考察 『沖縄文化』 第47巻第２号　pp48 ～ 62

沖縄県教育委員会　2017　第１章　総論　脚注42)『沖縄県史　各論編１　自然』 pp ９

沖縄タイムス　2002　首里城跡　ヤクシマザルの骨出土　愛玩用か　漢方薬か　使用目的は「？」『９月16日（月）　朝刊』

金子浩昌　1990　勝連城二・三の郭発掘調査で出土した脊椎動物遺存体（1986年度）『勝連城跡－北貝塚、二の郭および三の郭の遺構調査－』 pp175 ～ 273

金子浩昌　1991　第五章　第２節　今帰仁城跡出土の脊椎動物遺骸 『今帰仁城跡発掘調査報告　Ⅱ』 pp361 ～ 401

國原美佐子　2001　十五世紀の日朝間で授受した禽獣 『史論』 54　pp119 ～ 141

酒詰仲男　1961 『日本縄文石器時代食料総説』

設楽博己　2015　申サル 『十二支になった　動物たちの考古学』 pp119－132

圧武孝義・川本芳　2001 集団遺伝分野（Ⅱ　研究所の概要）　＜研究概要＞　Ａ）ニホン

ザルの集団遺伝学的研究　霊長類研究所年報　第31号　pp30－33
城間恒宏　1999　戦前の史料にみるケラマジカの記述『史料編集室紀要』第24号 pp95－116
城間恒宏　2002　ケラマジカに由来する若干の考察『史料編集室紀要』第27号　pp209－218
城間　肇　2001　第Ⅳ章 第５～17節『首里城跡-管理用道路地区発掘調査報告書』pp71～118
高良倉吉　1996　第四節　琉球王国成立期の首里城に関する覚書　丸山雍成編『前近代における南西諸島と九州－その関係史的研究』 pp109－129
谷川健一編集代表　1968 大島筆記 『日本庶民生活史料集成 第一巻篇』 pp358～60
とまり会　1974　泊風物誌　ニ、洋順の展望 『泊誌』 pp373～374
戸部良熙　1968「大島筆記」 谷川健一代表編『日本庶民生活史料集成 第一巻　探検・紀行・ 地誌南島篇』 三一書房　pp345～392
筒井　功　2013 『猿まわし　被差別の民俗学』
直良信夫　1947 『古代漁猟生活（再販)』 pp164―166
中山盛茂　1969　大島筆記 『琉球史辞典』 pp76
中村民彦　2004　東北地方の厩神信仰　平成16年度「牛の博物館友の会シンポジウム　牛馬の守護神　厩猿信仰」
那覇市史編集室　1982a 『尚姓家譜（大宗)』『那覇市史』資料篇第１巻７　家譜資料（３）首里系　pp385
那覇市史編集室　1982b 『翁姓家譜（支流)』『那覇市史』資料篇第１巻７　家譜資料（３）首里系　pp101
野本寛一　1989 『軒端の民俗学』
長谷川善和　1980　琉球列島の後期更新世－完新世の脊椎動物　第四紀研究　18　pp263～267
長谷部言人　1924　雑報　日本石器時代の猴について　人類學雑誌　第39巻第４・５・６號　pp217～218
原田禹雄　1995 『陳侃　使琉球録』 鳥獣門　猴（さる）＜撤録sā-lù＞　pp94
原田禹雄訳注　1999 『徐葆光　中山傳信録　新訳注版』 巻六　鳥獣　猴＜煞陸サル＞ pp554
比嘉優子 2001 第Ⅳ章 第１～４節『首里城跡―管理用道路地区発掘調査報告書』pp ９～70
比嘉春潮・新里恵二解題　1968　戸部良熙 大島筆記 上 『日本庶民生活史料集　第一巻』 pp359～360
広瀬　鎮　1989 『猿と日本人』
本郷一美ほか　2002　古代遺跡から出土したニホンザルに基づく分布の変遷　『Asian

Paleo primatology』 Vol.2 pp1-12
真栄平房昭　2010　第３部　古琉球の社会と祭祀　第４章　外国人の記録に見る古琉球　第４節　朝鮮人漂流民の見聞 『沖縄県史　各論編３　古流球』 pp421 ～ 426
宮城弘樹　2019　琉球王国時代の愛玩動物 『南島文化研究所所報』 第64号　pp １
毛利俊雄ほか　2000 原著 ミトコンドリアＤＮＡ変異を用いた種判別：沖縄県首里城出土マカク古骨と現世種との比較　『霊長類研究』Primate Res 第16号　pp87 ～ 94
毛利俊雄　2001　付篇　首里城跡管理用道路地区　出土の獣類遺存体について 『首里城跡―管理用道路地区発掘調査報告書』付篇　pp １～２
琉球王国評定所文書編　1991　亜人成行御国許江御届之扣　千五百五　嘉永五年ヨリ安政元年迄　同二年ヨリ四年迄 『琉球王国評定所文書』 第七巻　pp449 ～ 627